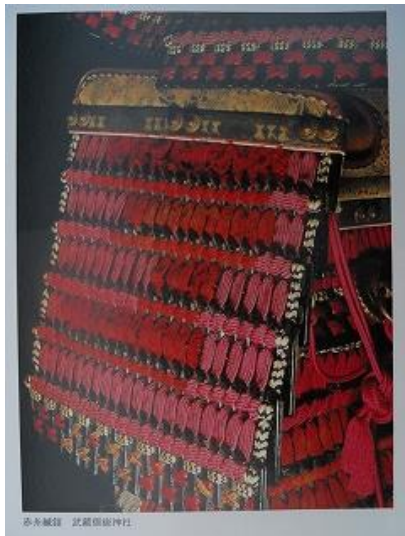


## 草木染あれこれ

「草木染」という言葉は、1930年に長野県の染織家山崎斌（あきら）氏が島崎藤村、竹下夢二、富本憲吉等の協力により銀座資生堂画廊で開いた「草木染信濃地織展覧会」で初めて使われた。化学染料が普及するに従い、従来の伝統的な染が廃れてしまうことを危惧した同氏は昭和初期の大不況で荒廃した農村復興のため「信濃工芸研究所」を設立し、「草木染」を復活すべく染織を中心に調査・研究を行った。

### 【植物の色／日本の色の歴史】

魏志倭人伝に卑弥呼が243年赤や青の絹織物を魏の皇帝に献上したと記載。これが文献上最古の染織記録。聖徳太子が603年「冠位十二階」に定めた色は紫・青・赤・



黄・白・黒それぞれ濃淡2色であるが、紫は紫草、青は藍、赤は紅花と考えられる。

平安時代末期に制作された「国宝赤糸織鎧」（武蔵御嶽神社所蔵 畠山重忠所用）は江戸時代に有名であったようで将軍吉宗が江戸城へ運ばせ同じものを所望した。

明治時代に当時最先端の化学染料によって補修されたが、現在ではすでに褪色がひどい。しかし、800年前の茜染めは鮮やかなまま。現在の染色技術ではとても再現できない高度な技である。（ピンクが補修して色褪せた部分）

江戸時代には奢侈禁止令により、地味な色・柄で遣いを出すことを競い合った結果、「四十八茶百鼠」が生まれた。日本の色が多彩になった要因でもある。但し、緑色は藍と黄色染料の重ね染でしか得られない。

明治時代に化学染料がもたらされると、天然染料とその染色技術は途絶えてしまったが、各地で苦心の末染色技法も徐々に復活してきた。今では斌氏の長男である山崎青樹氏等の研究・実践により約500種の植物から染色出来る。

### 【伝統的染料植物】

●紫：ムラサキ（紫草） ●青：クサギ（臭木）、タデアイ（蓼藍） ●赤：アカネ（茜草）、ベニバナ（紅花）、スオウ（蘇芳） ●黄：クチナシ（梔子）、カリヤス（刈安）、コバナグサ（ハ丈刈安）、キハダ（黄檗） ●茶：タブノキ、柿、ヤシヤブシ、ドングリ他多数 ●黒：シャリンバイ+泥染め（鉄媒染）、マテバシイ+泥染め等

### 【草木染の手法】

天然繊維のうち動物性繊維（絹・ウール）は染まり易く植物性繊維（木綿・麻）は染まり難い。特に木綿は蛋白処理が必要。ウールはフェルト化しやすい。また化学繊維は植物染料では染まらない。

●浸染（しんぜん：染料液に浸す）と捺染（なつせん：筆などで摺り付ける）

●糸染め（先染め）と生地染め（後染め）

●代表的な生地の染め方

①色無地

②絞り染：生地の各所を糸などで固く絞り、白く染め残して模様を作る。

③型染め：生地に文様を彫った型紙を当て染料を付けるか文様部分に糊を付けて白抜きにする。

④友禅染：捺染の一つ。筆や刷毛で絵画のように様々な色で描く。

●基本の染め方

①染材採集・裁断：葉、根、樹皮、実等の染材料を採集し、細かく刻む。②染液作り：染材を鍋に入れ、浸る程度の水で煮出す。③煮染め1：染液に布を入れて時々動かしながら煮染めする。④媒染：染液が冷めてから布を媒染液に浸ける。⑤煮染め2：媒染後、水洗してもう一度煮染めする。その後水洗・乾燥して完成。所要時間は5時間以上。

●媒染とはミョウバン（アルミ）、鉄、銅、錫、クロムなど金属を含む液に浸けて色素を繊維に定着させること。これにより発色良く褪色を防ぐ。但し、通常の草木染は日光による褪色は避けられない。媒染剤によりかなり色が変わる。



各種絞り染技法見本

### 【藍染めについて】

手順①タデアイの栽培（藍作農家）⇒ ②スクモ作り（藍師）⇒ ③藍を建てる（紺屋）⇒ ④染める（紺屋）

●建染め（染去）葉を発酵させてスクモを作り、灰汁に溶かして染め液を作り、布を浸け、大気中で酸化させて藍色に発色させる。常温・空気媒染。藍液から出した直後は緑色で、すぐ藍色に変わる。（染は日本での造語。日本以外ではヨーロッパ、西アフリカ）

●建染め（沈殿法）葉を水に2～3日浸け、棹などでかき回して空気を送り込み、石灰を入れると色素が沈殿する。上澄みを捨て残った液（泥藍）を染料とする。（中縄・インド）

●生葉染はタデアイの生葉に水を加えて粉碎し、布で濾して青汁を作る。絹布を浸けて染め、引き上げて空気に晒す。これを繰り返すと水色になる。常温・空気媒染。

井形啓己（千葉県佐倉市）